
勇者と魔王とその他モブ。

薙刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王とその他モブ。

【Nコード】

N6631V

【作者名】

薙刀

【あらすじ】

無愛想な性格の辻村 蓮はある日、友人（笑）で完璧超人の小野寺 竜真の、ラノベ的展開（異世界召喚）に巻き込まれた。正義バカな竜真は一も二もなく魔王退治を引き受けるが、無愛想な蓮は……主人公はその他モブの部類です。蓮「主人公だったらモブじゃねえだろ」薙「いいじゃねえか！それしか思い浮かばなかったんだから！」蓮「オメエはまったく……」

駄目作者（厨二病）が書いたグダグダな小説です。駄文です。主人公最強、チート等がお気に召さないかたは、すぐさまバックを

お願いします。

「プロローグ」(前書き)

他の方の小説を読んでもうちに、書いてみたくなりました。
まだまだ分からないことばかりですので、ご感想をお返しできない
等、

様々な不備があると思います。

ド素人ですが、宜しくお願いします。

プロローグ

そこに何時から居たのかは分からない。

ただ、気がついたらそこに居た。

夜なのか、とても暗い。数歩先が見えない位に。

時折獣の唸り声や遠吠えが聞こえてくることから、そこには自分以外の生物がいることがわかる。

………人が居るのかは分からないが。

この良く分からない状況でこうも冷静にいられる自分に驚くと同時に、呆れる。

自分は昔から、感情が無いと言っていいほど薄かった。

暫く惚けてると、近くの茂みから獣が現れた。

様子を見るに、自分を食す気でのだろう。

………生まれて初めて、怖いと思った。

おそらく、自分はあの獣に食べられて、死ぬ。

……だが、それでもいいと思った。

『怖い』というものであっても、初めてまともに感情を持てたから。

――獣が飛びかってくる。

――それから先の意識は、無い。

第一話 くらのべ的なテンプレ（異世界召喚）く（前書き）

主人公の一人称視点です。

主人公は心の中では自分、会話では俺と一人称を使い分けています。

第一話 くヲノベ的なテンプレ（異世界召喚）

「おい、蓮^{れん}！一緒に帰ろうぜ」

校門を少し過ぎたあたり、何故かつきまってくる完璧超人^{バカ}が声をかけてきた。

自分の名前は辻村蓮^{つじむら}。……. 除けば何処にでもいそうな高校生だ。

声をかけてきたのは小野寺^{おのでら} 竜真^{りょうま}。所謂完璧超人というやつで、何故かつきまってくる正義バカ。イケメン、頭脳明晰、運動神経抜群と三拍子揃っていて、ファンクラブもあるという物語^{ヲノベ}のユーシャサマみてえなやつだ。

「おい、れん」断る。俺は一人の方が良い。」…………ちえつ。今日もかよ」

五月蠅い。ちえつとかヤメろ。マジでキモい。…………毎日断ってるだから諦めろよな。

そう言っって何故か隣を歩いてくる竜真。オイ断ったろ。そしてこっちを見、

「ふふっ」

笑った。

オエっ…………吐き気が…………

「なんだよ」

「いや、隣歩いてんのに何も言わねえんだなと思ってさ」

…………どうせ言ったところで、俺はここを歩いてるだけだとか言うんだからなに言っただって無駄じゃねえか。

そんなこんなで数年前からあまり変わらない竜真^{バカ}に肩を落とした時、

真後ろから魔力が溢れだした……………

パキパキ……………パキパキ……………

「なあ…………何か変な音しないか？」

「しらん。少なくとも俺は関係ない。」

……………と思う。

こんな所さっさと離れたい、が。

「お、おい…………なんだよ…………あれ……………」

竜真が振り返ってしまったので、しぶしぶ自分も振り向く。

そこには……………空間に穴が空いていた。

その穴を見る……………

……………狙いは竜真^{バカ}みたいだ。なら、俺はしらん。

「な、なあ…………俺、だんだんあの穴に吸い込まれてる気がするんだけど……………うわっ！」

どうやらあの穴が本格的に竜真を吸い込みだしたらしい。

「安心しろ。搜索願いくらいなら出してやる。」

「てっ、ちよっ、おい！まっ、こなくそ！」

……………何故自分の腕を掴む？オイオイ、自分も吸い込まれるじゃねえか……………

「やば……………」

「うわああああ？」

次の瞬間には、もう吸い込まれる直前だった。

……………あ、こりゃ、自分も……………

終わったな。

自分の視界は、既に真っ黒だった……………

第二話 〈それぞれの出会い《リョーマ編》〉

〈竜真サイド〉

何故か後ろに現れたブラックホール（違うかもしれないけど）に吸い込まれた僕（等）は、少しの浮遊感を感じた後に地面に辿りついた。

……お尻から転んじやつたけど……

ま、まあ…それは置いといて……

目を開けてみると、豪華で綺麗な鎧を着込んだ所謂騎士と呼ばれてそうな人達や、杖を手に持ちローブを着た、ああ、魔法使ってこんな格好してんだろな…という人達が、溢れかえっていた。

………え？なに？撮影かなんか？

隣を見ると、惚けてるような蓮の姿が目に入った。

………蓮が惚けてるって初めて見た……

二人で惚けてると、染めてんのかな？水色の髪に、褐色の瞳を持った少女が話しかけて来た。

「g s h f f h s k e : b s o w v v z j t s m u s j x w i z k
t x q ?」

………うん。全然わかんない。

とりあえず……日本語はわかんのかな？

「えーっと……ここは？」

頼む？通じてくれ？

僕の言葉に暫く何かを考えていた彼女は、

「i s f j t j k d w b o d n i a j x i r b k t f i f v j r h
k」

と近くにいた鎧のオッサンに指示を出し、指示を出されたオッサンはどっかに行ってしまった。

あれ、おーい？返事は？

暫くオッサンを待っていると、オッサンは綺麗な箱を持って来、彼女に渡す。

彼女はその箱からネックレスとピアスを取り出すと、その二つを僕に渡して来た。

「g z i s k d t w h o t o o u h e z k g y o i g y x y g k k
y f d」

えーっと……付けろってことかな？

とりあえず、付けてみる。変な顔をされなかったから、おそらくこれで合ってるんだろう。

すると、

「あのう……声、ちゃんと通じてますか？」

うわっ！ビックリした！え、えーっと……しゃべれたのかな？日本語。

「あ、はい。ちゃんと通じてます。と、とりあえず聞きたいことが沢山あるんですが……」

「は、はい。えーっと……今から説明しようと思うのですが……その……この方は？」

あ、やべ、蓮のことすっかり忘れてた。

「あ、あいつは俺の友人で、辻村 蓮。そんで、俺は小野寺 竜真。よろしくね？」（ニコッ

すると途端に真っ赤になって、（急にどうしたんだろう……）

「は、はい。わ、私はレティフェレス・フォン・グラバーといいま
しゅ…ッ！　／＼／＼は、はわ…と、とにかく、こちらこそ宜しく
お願いしますっ？」

あ、囁んだw

「ところで、リョーマ様と、え、ええと…レン様でしたっけ。あ、
下の名前で呼んだ方が良いでしょうか？」

「？　あ、ああ。そういう事か。とりあえず、俺等の方では名前が
後になるんだ。だから、そのまま呼んで頂戴？　俺も名前で呼ばれた
方が良いし。」

そう言った途端急に機嫌が良くなった（何故？）レティフェレスさ
んに説明してもらう。

「そうでしたら、私のことはレティとお呼び下さい。それでは、説
明させていただきます。まず、この世界ですが、名前を《メノーラ
》と言い、リョーマ様方の住んでおられた世界とは別の世界です。
いままでは平和だったのですが、先日、死の山脈のさらに向こう、
魔国で魔王が復活してしまい、我々の力だけではどうしようもなか
ったので、古い文献に載っていた魔法を使い伝説の勇者様にお力を
貸していただきたく召喚しました。誠に勝手な都合で呼び出してし
まい、申し訳ありません。」

「いや、大丈夫。でも、本当に俺でいいの？　俺、なんの力も無いん
だけど？」

「その点は問題ありません。勇者様は必ず強力な力をやどしている
そうです。後で『覚醒の泉』という場所にいくので、そこで目覚め
ると思います。ですが…その…勇者様が二人というのが前代未聞で
して…」

「なるほど。大体わかった。それは後で泉に行けばわかると思う。
じゃあ、さっき渡してくれたネックレスとピアスは？」

「それは魔法具と言い、身に付けたら誰とでも会話ができるとい
う効果があります。魔法については追いつ追いつ説明させていただきます。
ところで…その内容をもう一人の方に説明していただいてよろしい

でしょうか？」

そうだった。蓮もいたんだった。

大体蓮に説明し終えて、蓮は、

「こんな二度手間せずに、そのレティさんが魔法具を身に付けられよかったんじゃないか？」

の一言だった…

それをレティに伝えると、

「あっ……………」

……今気付いたようだ…

魔法具をレティに渡し、レティにもう少し説明してもらう。

曰く、蓮用の魔法具は大至急商人から取り寄せることや、その他諸々……

「そういえば、ちゃんと元の世界には帰れるんだよね？」

「も、目下奮闘中です……」

というやりとりも行われ、帰れるか不安になったりしたけど……

「も、もうそろそろ国王様に会っていただきたいのですが……」

レティのそんな一言で、もうすぐ国王様とご対面だ。

緊張するけど…勇者の使命もあるし、しっかりしないと！

第三話 〈それぞれの出会い《レティフェレス編》〉

私はレティフェレス・フォン・グラバー。歴史と記録の国《グラバー》王国の第二王女です。

政治のことは姉様に任せていいとのことでしたので、私はずっと魔法の研究をして生きて来ました。

九年前、皆に恐れられていた魔王が突如消えてからは全ての国に平和がおとずれていたので、なにも考えずに研究に没頭できました。しかし、いまから一年半ほど前、また魔王が現れ、再び我々の国に侵攻して来ました。

魔王の軍勢は強力で、戦線は徐々に下がって行きました。

そんな時に、苦肉の策として、知識と魔法の国《デメテル》から異世界の勇者を召喚という提案をされました。

全ての国は、帰す手段も見つかっていない上に、全く関係の無い世界の方に押し付けることを渋りましたが、このままではどうしようも無いので実行されることになりました。

そこで白羽の矢が立ったのが私です。

勇者召喚についての文献が見つかったグラバーの人間ということと、魔法の才能がグラバーの中でもトップクラスだったというのが理由だそうです。

さて、準備を始めて一月。漸く準備が整いました。この間にも、魔国にはどんだん攻めこまれています。

いざ召喚！ということになったのですが…ええ。召喚自体は成功しました。はい。したのですが…

何で二人も居るんですか？

片方はものすごくイケメン、もう片方はなんだかピリピリしています。

……兵士達も混乱しているみたいです。ここは私が行くしかないでしょう。

ピリピリしている方はなんとなく苦手だったので、イケメンさんに話しかけます（ほ、本当に苦手だったんです！ここでイケメンさんに行った私は面食いなんかじゃありません！決して？）。

「あ、あの：とりあえずお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

う、うわっ！何を行ってるんですか私は？で、でも、変じゃないですよね？そうですよね？

……あたふたしている私にイケメンさんが言った言葉が、

「k e h t e o d t i f o d t h h d r y l p f t s l f x s u f i i h o u i o p b v i ?」

でした。

……はい。全くわかりませんね。ありがとうございました。

どうでしょう……会話ができればイケメンさんとお近づきに……で、ではなく、魔王退治を依頼できません！なにかいい案は……

そうです？魔法具があるじゃないですか？早速兵士Aさんに……

「『疎通のピアス』と『疎通のネックレス』を持ってきて下さい。このままじゃ会話ができないみたいですので。」

「はっ！」

さて、多少待ちましょうか。………あ、来たみたいです。

私は箱からネックレスとピアスを取り出し、

「あの：付けていただけますか？」

っと、言葉が通じないんです……ちゃんと伝わってくれましたかね？

どうやらちゃんと伝わったみたいです。では早速

「あのう…声、ちゃんと通じてますか？」

途端にビックリしたイケメンさん。眼福眼福。……じゃなくて！

「あ、はい。ちゃんと通じてます。と、とりあえず聞きたいことが
沢山あるんですが…」

「は、はい。え…っと…いまから説明しようと思うのですが…そ、
その…この方は？」

もし知らなかったらどうしましょう…あの雰囲気苦手なんですけど…
「あ、あいつは俺の友人で、ツジムラ・レン。それで、俺はオノデ
ラ・リョーマ。よろしくね？」（ニコッ

うああああ！何ですか？その笑顔は？こんなの見たら絶対落ちてし
まいますよ？多分落ちましたよ？ここに居る女性全員が？（自分含
め）

「は、はい。わ、私はレティフェレス・フォン・グラバーといいま
しゅ…ッ！／＼／＼は、はわ…と、とにかくこちらこそ宜しくお願
いしますっ？」

あああ！囁んじやいました？って、微笑ましいものを見るような視
線やめてください？うあ…

……なんとか正気に戻って説明を続けます。

後ろの方は……後でリョーマ様に説明していただきますしょう。

（説明中）

さて、説明し終えたのですが…結局ピアスとネックレスは戻ってき
ました。

：何で最初から自分でつけなかったんでしょうか……

まあ、それはおいといて：お二人には父上（グラールバ国王）に会っていただかないと：

「も、もうそろそろ国王様に会っていただきたいのですが……」
き、緊張しているようですけど、大丈夫ですよね……多分……

第四話 〈それぞれの出会い《レン編》〉

あのバカを標的にした魔法に巻き込まれ、自分は異世界に連れて行かれた。

……まったく：腕掴むなよ：若干イテエ：

今自分等は、質の悪い武器防具で全身を固めた騎士達と、三流の魔法使い達に囲まれている。

……この中に自分より強いやつは……いないな。

適当に観察しながらぼくとしてしていると、一人の女が声を掛けて来た。

「あ、あの……とりあえずお名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

おい……なんでそうなる？

てゆーかアーリン語だったな……じゃあここはメノーラか：

完全にリョーマに落とされたレティフェレスさんの話を聞くと、魔王が復活しました。だから助けて下さい勇者様くということらしい。

……適当に旅に出てずらかるかな：

口を挟むと面倒なことになりかねないので、無言で説明が終わるのを待つ。

すると、リョーマがさっき聞いた事を一から説明し始めた。

あー、わかってます。わかってますから。あーうぜえ：

あまりにもリョーマがウザかったので、ちよつと文句を言うことにした。

「こんな二度手間せずに、そのレティさんが魔法具を身に付ければよかったんじゃないか？」

「あつ……………」

……気が付かなかったことに驚きだ。

その後、適当に説明を聞き流していたら、どうやらこの国の王様に謁見しにいけらしい。

ついていかなかったら怒られるだろうし、
適当に聞き流すか…

第五話　　く謁見。そして覚醒する勇者様く

現在自分は、謁見の間でグラーバの国王に謁見していた。

「……ふむ…勇者が二人か…まあよい。……勇者達よ、まず、謝っておかなければならないことがある。まだ元の世界に帰す手段が見つかっていないにもかかわらず呼び出してしまったことを深く詫びよう。」

へえ…てつきり王族ってプライドの塊で出来てんだと思ってたな…チッ…やりづらい相手だ…

自分が心の中で舌打ちしている間にも、国王の話は続く。

「だが、勇者殿に協力してもらわない限り事態が良くならないのも事実。どうか、魔王退治に協力してもらえないだろうか」

それに対して竜真は、

「俺等にできることがあるなら、俺等にしかできないことなら、それで笑顔になる人がいるなら。俺は協力します。たとえ急に呼び出され、右も左も分からない状況でも、それが困っている人を助けない理由にはなりません。俺にできることがあれば、なんなりと。」

ちなみに、今グラーバの国王はさつきレティさんが使ってた魔法具を身に付けている。なので竜真の言葉は自分と国王にしか聞き取れない。他にあの魔法具を身に付けている奴もいないみたいだな。

「そうか…すまない。助かる。……ではもう一人の勇者殿。おぬしはどうだ？」

こっち来たか…ま、他の奴らに聞かれねえなら多少本音かたるか…

「失礼になるかもしれないが、俺は出会ってすぐの人間の言葉を鵜呑みにすることができない。故に、竜真とは別行動を取らせて貰いたい。そして、自分で答えを出す。それがどうなるかはわからないから、即答はできん。」

「ふっ…よからう。だが、まだ味方だと決まったわけではないおぬしには、最低限のサポートしかできん。それでもよいか？」

ま、そりゃそうだな。

「ああ、構わない。だが、話を聞く限り最低限のサポートはしても
らえるんだよね？」

「うむ。この城を出るまでの衣食住と、初期装備くらいは出そう」

……それくらいが妥当か。なにもないよりマシだな…

「さて、勇者殿。覚醒の泉の説明は受けたか？……そうか受けたか。
なら話は早い。レティ。勇者達を覚醒の泉へ」

そう言ってレティさんに魔法具を渡す王様。

「かしこまりました。では、リョーマ様、ツジムラ様、こちらです」
かくして、泉へと移動する自分等。

（移動中）

「ここが覚醒の泉になります」

着いたのは、すごい量の魔力で溢れた場所だった。
にしてもすごい量だな…

「では、まずリョーマ様からお入りください。魔法により、水には
濡れないようになっているので、心配はありません」

緊張した面持ちで、泉へと入っていく竜真……もうリョーマでいい
か。

リョーマが泉の中ほどまで入ったくらいだろうか。いままでうんと
もすんとも言わなかった泉が、突然眩い光に包まれた。

眩しッ？

ノリのいい奴なら某大佐のマネをしていたであろう眩い光は、暫く
するとゆっくり消えていった。

あゝ…まだチカチカする…

漸く視力が回復した頃、まさに『覚醒』したリョーマがそこにいた。

「うわあ…」

うん、レティさんがそうなるのも頷ける。

『覚醒』したリョーマは、以前とは比べ物にならないくらいに魔力と『気』の量が上がっていた。

……もうここまでくると人類最強を名乗ってもいいんじゃないかねえの？
ってくらいに。

魔力を感知出来ないリョーマでさえ、体から溢れる力に呆然として
いる。

それほどの力を感じるのだろう…

次は自分か…リョーマでこうなるとしたら…自分はどうなるんだ？

「では、次にツジムラ様、お願いします」

落ち着きを取り戻したリョーマが戻ってきて、レティさんが自分を
促す。

無言で泉に入る。

多少興奮していたが、泉に入って少しすると、その興奮は冷めてい
った。

この泉、どうやら入った人の才能を極限まで引き出すもののような
予想通り、中心まで行ってもなにも起きない。ってかリョーマの才
能どんだけだよ…

少し落胆しながら戻る。自分を見る目が同情と侮蔑になっていた。

最後に少しシラけてしまったが、勇者の^{リョーマ}覚醒は滞りなく終わり、自
分等は部屋へと案内され、休むことになった。
やれやれ…明日からめんどくなりそうだ…

第六話　く真正銘その他モブ　二日目の朝く

くリヨーマサイドく

とにかく昨日はいろいろあってびっくりしたな：

俺も結構ネタとか好きだからねく：夢オチじゃなかったらこれは言っておかないと。

「知らない天井だ：」

若干夢オチを期待してたのになく：

目が覚めた時間は、いつも起きてる時間と同じ午前6時だった。こんな状況でも同じ時間に起きるなんて：習慣ってすごいねくいつまでもベッドでぐだぐだしているわけにもいかないので、ベッドからでて、大きく伸び。

あらためて周りを見てみると、やはりこの部屋の凄さを実感する。どうしても落ち着かない、前の世界の軽く四倍はある広さ。

天井には豪華なシャンデリアが。ベッドはもちろん天蓋つきだし、床には柔らかい絨毯が部屋全体に敷かれている。

改めて、《勇者》ということを実感する。

それと同時に、昨日手に入れたこの力。

なんだかよくわからない《力》が、身体中を血流の様に駆け巡る。これはレティが言ってた魔力なのか？

思考に没頭してたら、不意に扉がノックされた。

ん？なんだろ：とりあえず返事、返事。

「はい？なんですか？」

昨日の終わりに魔法具を貰ってたから、会話に支障は無い。

「はい。お着替えをお持ちしました勇者様」

うん：勇者様か：なんかなく：ま、いいか。

「ありがとうございます。どうぞ」

その言葉で入ってくる：メイドさん。

はい。ファンタジーですね。ありがとうございました。

入って来て着替えを俺に渡すメイドS：え？イヤイヤ、なんでくれないの？

「？ 着替えも従者の仕事ですか？」

……このメイドさんを説得するのに時間がかかったのは言うまでもない…

（メイドBサイド）

どうもこんにちは、私、もう一人の勇者様に着替えを届ける仕事をするようになりました。メイドBです。

名前も出てないのに、先に出て来たのが一人いたという理由でBだそうです。

正真正銘のモブキャラです。私の名前が出る日はくるのでしょうか…

さて、部屋の前についたのですが…着替えも従者の仕事なんですよね…あ、朝ですし、変なことされませんよね？

覚悟を決めて、いざノック！と手を振り上げた瞬間、扉を開けられました。

「何か？」

あ、今は一緒に渡しておけと言われて渡された魔法具を付けてるの
で、会話ができるんです。

それにしても、なんでわかったのでしょうか？

「扉の前でずっとブツブツ喋られてたら、誰でも気付く。」

はわっ？声に出してたんですか？どどどどうでしょう？これって
弱味握られてますよね？

「弱味を握ったつもりは無いし、どうでもいい。それに着替えは一
着予備があったから間に合ってる。その魔法具を渡してくればそ
れでいい。」

……本人には失礼ですけど、淡泊すぎませんか？

なにもイベントが起きなかったことにぶすっとしながらも、魔法具

を渡す。

「どうも。では、用件は以上で？」

あ、もう一つ：

「お着替えが終わり次第、朝食に、と。王族の私室で。ということなのでお連れいたします。」

頷いた勇者様を案内するために歩き出す。

それにしても…私の名前は今後出るのでしょうか…

第六話 正真正銘その他モブ 二日目の朝 (後書き)

メイドBの名前が出る日はおそらく来ないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6631v/>

勇者と魔王とその他モブ。

2011年10月9日13時34分発行